
図書館だより

都城工業
高等専門学校
図書館

No.80

FEBRUARY 2017



「サン・ピエトロ大聖堂」

特集

校内読書感想文コンクール入賞者発表

都城工業高等専門学校

National Institute of Technology, Miyakonjo College

ヘミングウェイと私 図書館長 西村 德行 1

私の読書体験

...ある作家との出会い...電気情報工学科 渡辺 光庸 2

私の読書、研究、教育 物質工学科 濱田 英介 4

特集

校内読書感想文コンクール入賞者発表

校内読書感想文コンクール入賞作品..... 5

今年度の活動と来年度の図書委員会について

学生図書委員長 機械工学科 清武 大晃
副委員長 物質工学科 仲澤 侑花 19

第四回「深山書評」入賞者発表（入賞作品）..... 20

図書館からのお知らせ..... 24

図書館開館予定
学年末・春季休業期間中の長期貸出について
編集後記



表紙「サン・ピエトロ大聖堂」

サン・ピエトロ大聖堂は、創建は4世紀であるが、現在の建物は1626年に完成した。カトリック教会の総本山である。北側には、ローマ法王の住むバチカン宮殿が隣接している。

撮影時期：2014年3月
撮影場所：バチカン市国
撮影者：図書館長（一般科目）西村 德行

ヘミングウェイと私

図書館長 西村 徳行

昨年の『図書館だより』で、短編のすすめを書いたが、本稿はヘミングウェイの短編について書いてみたい。ヘミングウェイと言えば、『誰がために鐘は鳴る』(For Whom the Bell Tolls)や『武器よさらば』(A Farewell to Arms)といった長編や『老人と海』(The Old Man and the Sea)のような中編がよく知られているのだが、短編集も6冊出しており、その中には、素晴らしい短編も数多く収録されている。これは、彼の簡潔で力強い文体と無縁ではない。彼はアメリカ中西部の町で生まれ育ち、高校時代に新聞の編集に携わり、卒業後地元の新聞社に入社し、短い間ではあるが、文章作法を徹底的に叩き込まれたという。もちろん、その後アメリカの作家シャーウッド・アンダスンやパリでのガートルード・スタインが、彼の文体に深い影響を与えたのではあるが。

私事で恐縮だが、私は大学卒業後、宮崎の県立高校に勤めた。その2年後に、縁あって都城高専に勤めることになったのだが、最初は、県立高校との違いに戸惑いが大きかった。特に違うのは、高専では、研究も教員の仕事のひとつであることだった。もともと、本を読むことは大好きであったし、大学で少し読んでいたこともあり、ヘミングウェイを研究対象として選んだ。「まずは短編から」と短編集を読み始めたのだが、その中で特に惹かれたのが、「インディアン部落」(“Indian Camp”)という作品だった。幼いニックを連れて湖畔にキャンプに来ていた医者である父が、難産で苦しんでいるインディアン女性を助けるためにインディアン居留地に行き、麻酔なしでジャックナイフを使って帝王切開を行い、無事出産させる。やれやれと2段ベッドの上に寝ていた女性の夫の顔を見ようと覗くと、夫は首を切って死んでいた。父はそれをニックから隠そうとしたが、ニックははっきりと見ていた。というのがあらすじである。キャンプ地からボートに乗って湖を渡り居留地へと向かう場面から始まり、帰りのボートに乗っている場面で終わる短い作品だが、全編に緊張感が漂った素晴らしい作品だと思う。

この作品の最後は、幼いニックが、自分は決して死なないと確信したという場面で終わるのだが、麻酔なしの手術で悲鳴をあげる女性とその直後の夫の自殺死

体と、ハード過ぎる場面に遭遇した後何故自分は決して死なないと確信したのか、その疑問が読後感として強く残った。この疑問を解決すべく、彼の他の作品や彼の書簡集や評論家の本等を読んでいった。そこで出会ったのが、「三発の銃声」(“The Three Shots”)という作品である。これは、独立した短編ではなく、元々「インディアン部落」の前半部分として書かれていたものを、短編集出版の際に、ヘミングウェイが削除したものである。それを評論家のフィリップ・ヤングが、ニックを主人公にしたヘミングウェイの短編をまとめて、The Nick Adams Storyと言う本にした際に、その巻頭にこの作品を載せた。

「三発の銃声」は、父と叔父がニックをひとりテントに残して湖に釣りに行く。その際、父から何かあったらライフルを3発撃つように言われる。ニックは、賛美歌の「いつか命の絶たれる日が来る」という歌詞を思い出し、恐怖がつのってライフルを撃ってしまうと言う話である。「インディアン部落」の緊迫した構成からして、この部分を削ったのは正解であったと思うが、当初ヘミングウェイがこの弱いニックを書きたかったのも理解できるし、「インディアン部落」の最後の場面に対する疑問も私なりに腑に落ちた。

その辺りのことは、本校の研究報告第18号に“Hemingways Indian Camp: Farewell to Fear of Death and Farewell to God”というタイトルで書かせていただいた。図書館に保管してあると思うので、興味のある方は読んでほしい。平易な(拙い?)英語なので、学生諸君にも読めると思う。本論では、ヘミングウェイは「インディアン部落」で、死の恐怖からの決別・神との決別を宣言したとかなり大仰な結論を出したのだが、ヘミングウェイが生きていたならば、「私はそんなことをまったく考えていない。」と激怒したかもしれない。

図書館長を拝命してこの2年間、読書の楽しさを伝えようと私なりに努力してきたつもりだが最後にこういう深く掘り下げた読み方もあることを紹介させていただいた。楽しいことが身の回りにたくさんある昨今だが、どうか刹那的な楽しさだけを追い求めず、まだ見ぬ素晴らしい相手(本)を求めて図書館に足を向けてほしい。

私の読書体験 --- ある作家との出会い ---

電気情報工学科 渡辺光庸

私は、小・中学校では野球を、高校では陸上競技をクラブ活動としてやってきた。したがって、この頃の自身の思考・行動様式の基本はいわゆる「体育系」であり、集団生活向きの「よい子」であった。特に読書好きというわけでもなく、読書傾向もいわゆる乱読で、少年雑誌以外では、国語の教科書にとりあげられるような森鷗外、夏目漱石、島崎藤村、志賀直哉、井伏鱒二、芥川龍之介、川端康成、太宰治など明治から昭和にかけて活躍した大家の小説を素直に読んでいた。特に、強い印象はないが、あえていえば、龍之介の時代短編ものと鷗外は好みで、志賀直哉の長文は何かひっかかって読みにくく好きでなかった記憶がある。

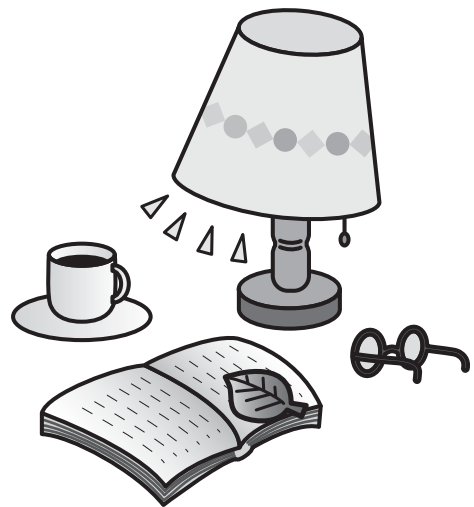
そうした私も大学生になると、ずっと「よい子」だった反動か？ ちょい悪な小説が好きになり、五木寛之の「さらばモスクワ愚連隊」、「蒼ざめた馬を見よ」、「青春の門」なども読んでいたが、特にサリンジャー「ライ麦畑でつかまえて」が印象に残っている。青年時代特有のある種の潔癖性を扱ったこの作品は、ペンシルベニアの高校を退学になった主人公が、ニューヨークを3日間彷徨し、「...だってさ。というわけで...」という独特の翻訳で、第一人称的に語っていくというスタイルである。リズムカルに読み、「インチキ」という概念、いわゆる「本音と建前」の使い分けに対する敏感さは、若者の特性なのか？ 共感したことを覚えている。この流れにある日本版サリンジャーといえるものが、芥川賞をとった庄司薫の「赤頭巾ちゃん気をつけて」を初めとする、「白鳥の歌なんか聞こえない」、「さよなら怪傑黒頭巾」の3部作である。21世紀になり復刻版が出版されているようだ。

大学学部生から大学院生になると、家庭的な事情もあり経済的理由から、専門書以外の読書はめっきり減り、最低限の授業以外は、ただちにアルバイトに向かう日々だった。野球好きもあって、中日球場（現：ナゴヤ球場、ナゴヤドームとは違う）でのアイスクリーム売りの元締めをやったり、家庭教師や学習塾の講師をしたりだった。そんな塾の一つが「加藤弓子教室」で、名古屋駅太閤口（新幹線口）近くに5階建てのビルを構えた名古屋では大手の学習塾であった。私立中

学を目指す小学生や高校受験を控えた中学生を相手としていた。加藤弓子塾長は元小学校教師で、ご自身も講師を務めていたが、他に、専属講師が2名とアルバイトの学生講師が数名いた。私の担当は中学生の数学の教室授業と個人指導であった。そのときに、小・中学生の国語を担当していた専属講師の一人が、本名：加藤甚吾（じんご）、別名：加藤三紀彦（みきひこ）で、弓子塾長の実弟であり、塾の講師連中には、別名で紹介されていた。彼は、私より4歳年上で、早稲田大学政治経済学部を卒業したのち、塾講師として生計をたてながら、小説家を志望し、映画の台本書きでフランスへの遊学を終え、帰国したばかりであった。ある日、教室ビル5階の講師控え室にて同席し、コーヒーを飲みながらお互いのことを話すことがあり、彼の生活がかなり禁欲的で、読書と映画鑑賞以外、全く興味を示さないこと、推理もの中心の短編小説を書いて雑誌投稿していることを知った。どうもその際、小説が嫌いではないと私がいったらしく、何日か後、原稿用紙50枚ほどの短編推理小説原稿を読んでくれと渡された。たしかタイトルは「金魚を飼う女（教師？）」だった。筋書は凡そ忘れたが、ある小学校の女性教師（弓子塾長がモデルか？）が、過去に恨みを持つ男を殺し、プールに沈め、そこにいる金魚に半年がかりで、死体を食わせてしまい、死体なき完全犯罪を試みるというものであった。当時、学校のプールは夏場以外も防火用水として水がはられており、中には魚を飼育することもあったことからヒントを得たようだ。内容は面白いが、金魚は肉を食べないのではないかと原稿と共に感想を返したところ、金魚は水中の虫なども食べるし、基本的に雑食だ、と反論されたのを記憶している。彼とは、その後、3年ほどの間に、何度か喫茶し会話したが、私が就職で関東に転出したため、映画「カッコーの巣の上で」を一緒に観たのが最後で、未だに金魚の食性は知らないし、その推理小説がどうなったかも知らない。ただ、私自身はそれまで推理小説など興味がなかったが、それ以後、推理が面白くなり、いわゆる社会派ものを中心に、特に松本清張ものを好んで読むようになった。「点と線」、「ゼロの焦点」、「霧の旗」、「遠い接近」...と代表作だけでも膨大な作品があるが、「砂の器」が一番印象にあ

る。清張に続き、森村誠一、斉藤栄、夏樹静子、西村京太郎、東野圭吾、宮部みゆきなど推理ものはいまだに続いているし、さらに派生しSFものまで範囲を拡げていった。

最近、十数年間は、仕事に関する専門書や新聞以外は、あまり書物を読まなくなっている。そうした中、細々ながらなんとか読書の楽しみを継続していただけるのは、彼に推理小説原稿を見せられたことがきっかけであり、感謝している。その彼は、私と映画を一緒にした2年後、ペンネームを連城三紀彦とかえ、昭和53年「変調二人羽織」で幻影城大賞をとり、作家デビューした。昭和56年に「戻り川心中」で推理作家協会賞、吉川英二新人賞を立て続けに獲得、メジャー作家の仲間入りを果たし、昭和59年にはなんと短編「恋文」でとうとう直木賞を獲得した。その後、昭和60年に得度（名古屋の実家の寺）し、1年間の修行の後、再度文壇に復帰し、多数の作品を発表したが、ガンのため3年前平成25年10月に永眠した。享年65歳であった。私も65歳退職を機会に、彼への感謝を込めて膨大な作品群、「人間動物園」、「白光」、「造花の蜜」、「小さな異邦人」、「女王」なども読んでみようと思っている。合掌。



私の読書、研究、教育

物質工学科 濱田英介

今も本は比較的よく読むのですが、専門書以外では、経済、教育、時事問題などの本が多くなりました。日本社会や世界の状況をもっと知りたいと思うからです。

小説をよく読んだのは、高校を卒業してからで、このころは、文学作品と言われるものは何でも、飢えたように読んでいました。日本文学だけでなく、海外の作家の作品、中国の古典に至るまで、手当たり次第の乱読でした。

東京神田の古本屋にもよく行きましたが、書店の棚が宝のように思えました。当時は、どう生きるかとか、自分の心を知りたいという思いでいたのを思い出します。40年以上前の、確かに若かった頃の自分史です。

今では、読んだ本の内容もほとんど思いだせませんが、三島由紀夫作品の精緻で美しい文体やサンテグジュペリ作品にある“生きる勇気”のようなものは、それに感動したことを覚えています。やがて、大学院に進むと専門の研究に心が向き、小説から少しずつ離れていきました。

研究は、私の場合、フィールド(野外)とともにあったといえます。大学時代は土壌学、土壌微生物学が専門でした。スコップを持って山や田畑などフィールドに出れば、穴を掘り、現われた土壌断面の調査と土壌のサンプリングをして、研究室に持ち帰っては、土壌の特性や微生物のはたらきなどを調べていました。なんとも泥臭い仕事ですが、地球と対話しているような気になってとても充実していました。また、フィールドや現地ですべてが起きているかを知ることは、とても大事なことだと気づきました。

企業に勤務すると、テーマは全く変わり、遺伝子組換え菌によるアミノ酸発酵になりました。微生物の培養や微生物の生産物の分析など、時に朝4時ごろまで仕事をすることもありました。ワークライフバランスは完全に崩れていましたが、当時はそれが問題になることはありませんでした。

その後、部署を変え、微生物を利用した環境浄化や排水処理など、テーマも様々に変わりました。その間、海洋調査船による新奇海洋微生物の探索や海外の海洋汚染現場の調査にも参加しました。海がフィール

ドとなっていました。

大学での研究と企業の研究開発は、その進め方が全く違う場合が多く、苦労もしましたが今となってはよい経験、よい思い出です。

高専に赴任してからは、それまでの経験を踏まえ、研究の軸を微生物として、卒業研究や専攻科特別研究のテーマに微生物が関わるようにしました。テーマの一つのモンゴル国での水質調査研究は、調査メンバーにも恵まれ、大きな仕事になったと思います。この時のフィールドは草原や砂漠でした。この調査研究も学生の卒業研究に組み込みましたので、教育ではあるのですが、学生あつての研究と感謝しています。

さて、教育に関して少し述べます。最近機会があって、市内の小学校の研究授業に2回ほど参加しました。今、本校でも取り上げられているアクティブラーニングが取り入れられておりました。先生は十分準備して、授業を分単位で組み立て、それに沿って生徒たちの理解を図ります。

授業後は他の先生も含めて、その日の授業の反省会をします。そこでは教頭先生をファシリテーターとして、かなり突っ込んだ議論がなされておりました。ここまでやれば授業は優れたものになると思いました。

高専の教育と小学校の教育を同列に扱うことはできません。とは言え一コマの授業を巡って議論し、授業の改善に繋げようとするこの小学校の“チーム力”には敬服いたしました。

OECD はじめ多くの国々で注目されている高専教育です。人口減少の中、全国に50以上もあり、高専の特性からも、国際化や地域との共生はもはや避けて通れないのではないかと思います。

第1学年	『高瀬舟』を読んで.....	機械工学科	武内 詩乃
	『銀河鉄道の夜』を読んで.....	機械工学科	堀内 遙介
	『ソロモンの指環 動物行動学入門』を読んで.....	電気情報工学科	原口 尚大
	『人間失格』を読んで.....	物質工学科	甲斐 風香
	『檸檬』を読んで.....	建築学科	石本 未憂
第2学年	『天才』を読んで.....	機械工学科	勝吉 琉斗
	『人間失格』を読んで.....	機械工学科	藤田健太郎
	『火花』を読んで.....	電気情報工学科	黒木 春信
	『変身』を読んで.....	物質工学科	馬場 詩織
	『罪と罰』を読んで.....	物質工学科	前田 稜太
第3学年	『檸檬』を読んで.....	建築学科	青井 優奈
	『百物語』を読んで.....	機械工学科	森園 悠太
	『ひかりごけ』を読んで.....	電気情報工学科	清家 竜司
	『木』を読んで.....	物質工学科	山口 陽香
	『老人と海』を読んで.....	建築学科	新見 彩華

校内読書感想文コンクール入賞作品

『高瀬舟』を読んで

かつての私は、『高瀬舟』があまり好きではなかった。何故と問われれば、それは作中に出てくる喜助に原因がある。

物語を読むときは、いつも同じ読み方をする。登場人物の気持ちになりきり、目の前でストーリーが展開されているかのように想像をする。そうすることで、より深くその物語の世界に入り込める感じがするから。そして、その感覚が私の喜びにもつながるから。

でも、中学生の時に会った『高瀬舟』は、今までに読んだどの物語とも違うようだった。理解し難い登場人物が.....喜助が居たのだ。喜助のことに関する描写が、私にはとても奇妙なものに思えた。まず、「い

1年 機械工学科 武内 詩乃

かにも神妙に、いかにもおとなしく」という表現。親類がいなくても罪人が島へ流されるのだから、泣いたり、打ちひしがれたりする様子が描かれそうなものだと思った。さらに妙なのは「額は晴れやかで目には微かなかがやき」や、「鼻歌を歌ひ出すとかしさう」等の人を、ましてや弟を殺めたとは思えない喜助の描写だった。同心である庄兵衛も私と同じように疑問に思ったらしく、彼は喜助に問うている。「何を思っているのか。」と。その問いに対しての喜助の答えは、自分の生活が苦しかったことと、お上に貰った鳥目二百銅のことを踏まえたもの。庄兵衛はその答えで納得のいったようだったが、当時の私には納得がいかなかった

た。お金なんかで弟を殺した苦しみが消えるはずがない。そう思った。だからといって、弟のことを嫌っていたとかそういうことでもないのだ。弟を殺した経緯についても喜助は話すが、そのようなことをうかがえる描写はまったくない。むしろ、医者と呼ばうとするなどの言動から、弟を生かしたいという想いが伝わってくる。だから、なおさら喜助の態度、その描写が合っていないように感じられ、喜助の気持ちになって物語の中に入ることが出来なかった。何度読んでも同じだった。私の中で『高瀬舟』はもやもやする、あまり好きではない本になってしまったのだ。

それから一年程が経ち、高専生としての初めての夏休みが近づいていた。読書感想文の課題図書の中に私は見つけてしまった、『高瀬舟』の名を。中学生のときに感じた、理解出来ないという感覚を思い出す。そして、考える。(あれから約一年。もしかしたら、今の私なら少しは喜助のことが分かるかもしれない。)書くものを決めた。

内容はほとんど覚えてはいたが、あらためて読むことにした。難しい言葉も調べてあるし、喜助の心情を

読み解くことを目標にして読み進める。場面ごとに数回読んで思ったことを書き出してみ、じっくり考えてみて。最後までまとめて、もう一回全体を読む。すると、あることに気がついた。「ん、ちょっとわかるかも。」思わず声が出た。喜助の気持ちが、以前と比べると分かる感じがして、物語の世界の入口に入り込めた気分。気のせいじゃないと思って、もう一度読む。気のせいではなかった。喜助が弟を大切に思っていたのは事実、その死を悲しんでもいる。でも、それ以上に前向きに生きようという気持ちが強い。「兄に迷惑をかけたくない」と思って逝った弟のためにも、そう生きようと思っている。そういう解釈が自分の中で出来た。そこでやっと喜助の考え方に納得した。どんなに厳しい環境におかれても、前を向いて生きる。自分の命は自分だけのものではないから。喜助がそう言っている気がした。

読書はやっぱ楽しいな。自分の納得のいくまで読んでこそ意義がある。そんな風に思いつつ、『高瀬舟』を書架に戻した。

『銀河鉄道の夜』を読んで

私は物語が好きだ。現実には起こりえないような奇妙で愉快的ことも、物語の中でなら当たり前のように起こる。そして、読み終えた時に、喜びや悲しみ、感動や寂しさをおぼえる。私に様々な感情をもたらし、何かを考えさせてくれる。そんな物語が、私は好きだ。

幼い頃の私は宇宙に憧れていた。勿論、今でも憧れているのだが、幼い私はロマンチストであり、宇宙といえば今の私とは違ったものを思い浮かべていた気がする。高校生になった私に「宇宙とは何か」と聞いたら、「宇宙は真空の空間であり、幾多の天体が存在する」などと真面目ぶって答える。しかし、幼い私の頭にあった「あの」宇宙を蘇らせてくれたのが、『銀河鉄道の夜』だった。

『銀河鉄道の夜』は、少年ジョバンニとカムパネルラが銀河鉄道に乗って旅をする物語。そこに描かれている宇宙には、あやしく透き通った水や水晶の砂、お菓子のような味のする驚など不思議なものがあり、さながら夢の中のような。本を読みながら私は、銀色の星が一面に広がる中を、列車が進んでいく光景を思い浮かべて心を踊らせた。きっとこの物語を書いた宮澤賢

1年 機械工学科 堀内 遥介

治の頭の中には、幼い私と同じような神秘的な宇宙があったのだろう。彼は子供のように豊かな想像力を持っていたに違いない。

主人公のジョバンニは、純粋な心を持つ少年だと思う。作中の彼は非常に感情豊かに描かれているからである。それが分かる部分はいくつかある。一つ目は、冒頭の授業中の場面である。ジョバンニは先生に天の川は何でできているかを聞かれた。ジョバンニは、天の川が星でできていると知っていたのだが、眠くて答えることができなかった。そして、ジョバンニは顔を真っ赤にして、眼に涙をためてしまう。このことから、彼の真面目さをうかがうことができる。その後、代わりに答えるように言われたカムパネルラは、気をつかって答えなかったので、ジョバンニはひどく申し訳ない気持ちになっただろう。

二つ目は、白鳥の停車場から外の景色を見る場面である。ジョバンニは、目の前に広がる銀色のすすきや青白く光る銀河を見て愉快的気分になり、足をこつこつ鳴らしてみたり、窓から顔を出して口笛を吹いてみたりする。あまりに楽しくて、体が勝手に動くのだら

う。感情を体全体を使って表現するところから、彼の少年らしさが伝わってくる。これがジョバンニの個性であり、良いところなのだろう。

三つ目は、船が沈没して亡くなった、青年と女の子と男の子が乗ってくる場面である。先程までジョバンニは、カムパネルラと話していたのに、カムパネルラは乗ってきた女の子と楽しそうに話を始めてしまった。ジョバンニは悲しくなってしまう、遠くに見える青い火を見て心を落つけようとする。彼は誰とも話せなくなったことで、寂しくなってしまったのだろう。私も時々、孤独を感じて寂しい気持ちになることがある。その時私はジョバンニと同じように遠くを眺める。遠くを見ると、広い世界に自分を呼ぶ人がいるような

気がして、独りではないと思えるからだ。彼も同じ気持ちだったのかもしれない。

『銀河鉄道の夜』には、「さいはひ」という言葉が何度か出てくる。終盤の方でジョバンニは、「ほんたうのさいはひは一体何だらう」と言い、カムパネルラは「僕わからない」と言う。この物語に出てくる人たちは、明るい顔をした人もそうでない人も、「ほんたうのさいはひ」を見つけることができなかつたように、私には思えた。「ほんたうのさいはひ」というものは誰にも分からないのかも知れない。しかし、ジョバンニはそれを探しに行く決意する。私もこの決意を受けて、自分にとっての「さいはひ」を探したいと思った。こんな気持ちにさせてくれたこの物語が私は好きだ。

『ソロモンの指環 動物学入門』を読んで

1年 電気情報工学科 原口尚大

この本は、ローレンツが「刷りこみ」という動物の生活史のある時期に、特定の物事がごく短時間で覚え込まれ、それが長時間持続する学習現象の一種を解明する過程で、動物達と共に生活し、彼らの行動を観察し、理解しようとしていくドキュメントである。

話は変わってしまうが、このローレンツという人は、少し僕に似ていると思う。僕も小さい頃は、1人で毎日昆虫探しに行き、生物と触れ合っていた。昆虫を育て、成虫にして、外へ放す。こんなことばかりやっていたが、毎日が充実して楽しかったのを覚えている。

さて、話に戻り、ローレンツは、動物と共に生活するのだが、その中でコクマルガラスという鳥との話が印象深い。調べて分かったが、コクマルガラスは、ガラスとついているが、小さく、黒白色をした可愛らしい鳥である。そのコクマルガラスとの話の内容はこのようなものである。

「親になってから飼った一羽のコクマルガラスが、私を恋するようになり、私をコクマルガラスの妻とまったくおなじようにあつかうということもあった。この鳥は、自分のえらんだ直径わずか二、三十センチの巣穴の中に私をはいりこませようと、何時間でもしんぼう強く努めるのだった。」と、まあ、続くのだが、この先は、彼が自分、ここではローレンツに彼自身が思ういい餌を自分に食べさせようとするのだが、人と鳥では食べ物も違うため、ローレンツは食べられない。こんなごく単純に見える話にも私は心を引かれるものがある。彼から見たら、ローレンツは、妻なのだから

当たり前なのかもしれないと僕は思う。

また、ハイイロガンのマルティナの話も感動した。まずは卵がかえって生まれてくるシーンだが、動物は、生まれてきて最初に見た動く物を母親だと認識してしまう。ここで、大事件がおこる。生まれて来た時、彼女は頭をすこしかしげ、大きな黒い目でローレンツを見上げてじっと見つめる。そして、ローレンツは、この後こう述べている。

「彼女の黒い瞳でじっとみつめられたとき逃げださなかつたばかりに、不用意にふたことみこととなにか口を開いて彼女のあいさつを触発してしまったばかりに、私がどれほど重い義務をしょいこんでしまったか、さすがの私も気づかなかつたのである。」

つまり、最初に見た動く物を母親だと認識してしまう。それをあまり考えていなかったローレンツは、うっかりガンの生まれてきた場所で、動いてしまった。しかし、もう遅く、ガンはローレンツを母親と認識してしまった。ローレンツは、最初知らず、ガチョウにガンを育てさせようとする。ローレンツが去るとき、母親の博士に向かって、必死に泣きながら走っていく。ヒナはまだ立っていることさえできない。しゃがむことができるだけ。死にものぐるいで、母親が行ってしまうという状況に迫られて、走ってきている。ガンの子は、決意を決めてやっている。それらのガンの行動もあり、博士も母親になる覚悟を決めたようだった。博士も、「ため息をつきながら私は、この十字架を肩ににない、家へ連れて帰った。」と言ってい

る。

この話は、コクマルガラスの時の話とは違って感動する内容である。ハイイロガンの時は、もう大人で情緒も安定しているであろうが、ハイイロガンの場合、子どもで母親が急にいなくなる現実を受け入れられなかったのだろう。しかし、このガンの子どものすごいところは、母親がいなくなる状況で動いたことだと思う。人間では、赤ちゃんが生まれてすぐ、母親が自分を置いて去ろうとしても動いて母親の後をついていくことはできないだろう。だから、僕はこのハイイロガ

ンの行動力に感心し感動した。

ローレンツが述べる一部分、「人間的なものは、ほとんどつねに、前人間的なものであり、したがってわれわれにも高等動物にも共通に存在するものだ。」は、感心した。いつも僕らは人間視点から物を見て、人間が動物界の頂点だと、動物が人間のまねをしていて面白いなど感覚的に思っているが、人間の行動も言ってみれば動物的なのもかもしれないということだと思う。人間ももともとは猿で、そのずっと前をたどると、自然のなかで生まれ形成されたものだから。

『人間失格』を読んで

「恥の多い生涯を送って来ました。」とても有名で、実にインパクトのあるこの冒頭の書き出しに惹かれ、ずっと読みたいと思っていた、太宰治氏の手になる『人間失格』。小学生の頃からずっと好きで読んでいた本の中に、この冒険の書き出しが記されていたことがきっかけで、興味を持つようになった。

さて、私がこの小説『人間失格』を読んで考えたことや、感想を述べていこうと思う。

第一に受けた印象は、とても難解で、なんて複雑な内容だ、といったことである。太宰治氏がいったい何を伝えようとして、どのような意図を隠しているのか、どのような世界観なのか、といったことが容易に推測できる内容ではなかった。

第二の印象は、読む者を引き込む不思議な魅力のある内容だ、といったことである。この小説の中の手記の書き手大庭葉蔵が、幼い頃から始めた「道化」を生涯ずっと演じ続けて、人間に異常なまでの恐怖感を抱きながら生きていく人生を知れば知るほどに、まるで世の中の現実や真理を思い切り突き付けられるような、不思議な印象を受けた。

何度も繰り返し読み、葉蔵の独特な観点や感情、発想、「道化」を演じ続けることとなった経緯などを知れば知るうちに、いつの間にか話の中に引きこまれて抜け出せなくなる……、そんなとても不思議な感覚を、この小説を読んで、初めて味わった。

人間はなぜ「あざむき合っているながら、清く明るく朗らかに生きている」のか。私も疑問に思うことがある。当たり前のように、あたかも事実であるかのように、大嘘を平気そうな顔をしてあっさりと話したり、たとえ自分に非があるかと全く悪びれる様子もなく、

1年 物質工学科 甲 斐 風 香

自分を責めずに他者のみを責めたりする人がいる。

また、裏の顔と表の顔とでも言おうか、八方美人とはまた違って、人によってあからさまに態度を変える人がいる。そのような人たちを見て、考えていることなどを知った時、底知れない闇が隠されているのではないか、という不安を抱くことがあったほどである。大袈裟に聞こえるかもしれないが、実際にこの疑問について酷く頭を抱えたことがある。しかし、未だに納得のいく答えは導き出せていないため、今もふと疑問になって困惑してしまう時がある。いったい、なぜ酷い罪悪感に襲われて苦しくなったりしないのだろうか。

また、この小説を読んでいる時、ずっと引っ掛かることがあった。葉蔵は「人間を極度に恐れているながら、それでいて、人間を、どうしても思い切れなかったらいい」ために、「人間に対する最後の求愛」の形として「道化」を演じ始めた、という内容についてだ。

なぜ、葉蔵は「人間を、どうしても思い切れなかった」のか。明確な答えは記されてはいなかったため、私は色々な理由を考えた。

一つは、葉蔵は人間に対して恐怖を抱きながらも、実は自分以外の人間への何かしらの憧れがあったのではないか、という考えである。他には、自分も他の人間と同じように生きたい、そんな願望が心の何処かにあったのかもしれない、などといったことだ。

この小説は、実に面白かった。何とも言えぬ気味の悪ささえ感ぜられたが、読むうちに、これは不思議と面白さに変わっていった。

『人間失格』は、主人公である葉蔵の人生を通じ、自分が思っている自分と、他者が思っている自分とが酷

く交錯する中、本当の自分とは何なのかを深く考えさせられる小説であった。正しい生き方とは何か、善悪とは何か、などといったことを深く考えさせられ、まるで底が見えぬ谷底のようにとても深い内容で、自分でも気づかぬうちに物語に引き込まれてしまうような、とても不思議な魅力をもった小説である。

『檸檬』を読んで

「えたいの知れない不吉な魂が私の心を始終圧えつけていた。」から始まる『檸檬』は、その書き出しも影響してか、私に僅かな息苦しさを感じさせた。

題名から勝手に、レモンのようにさわやかで澄んでいて、きつとうすい水色が似合うような作品だと想像していた私は、読み始めて驚いた。想像していた要素が何ひとつとしてなかったからだ。むしろ正反対だったと言ってもいい。

心をおさえる、不吉の魂のような憂鬱に苦しめられる「私」は、その憂鬱を抱えながら京都の街をさまよう。以前は「私」が好んだものも、今では「私」をいたたまらなくする。いつものように京都の街をさまよっていた。「私」は、寺町の果物屋で檸檬を買う。檸檬を手にしたときから、不吉な魂がいくらか晴れていった。そのため、最初避けていた丸善に入ってみようと思う。だが丸善に入ると、心を満たしていた幸福感は逃げ、憂鬱だけが立ちこめていく。画本の棚に来て心は晴れず、棚から抜いたままの画本は積み上がっていく。そのとき「私」は袂の中に檸檬があるのを思い出す。思いつきのままに画本を積み上げ、その頂きに檸檬を据える。その状態をそのままに、なにくわぬ顔で外に出る。あの檸檬を爆弾に見たてて。

だいたいのはあらずじはこうだ。どうだろうか、あまりに薄暗すぎやしないか。読み終わってまず、第一に抱いた印象は、主人公は頭がおかしいのでは? だった。だってそうだろう、病気なのに休むでもなく歩きまわり、レモンを爆弾に見立てるなんて、普通であればしないではないか。ただ、気持ちが変わらないわけではないのだ。こう思ったことはないだろうか、常識なんて考えずに行動してみたい、と。ただ気分がのらないから学校を休みます、と言ってみたい。ただ思うままにそこらの壁に落書きしてみたい。手荷物ひとつで遠い場所にいきたい...などなど。どれも考えたことはあれど、常識と理性が邪魔をして行動に移せない。いっ

「もはや、自分は、完全に、人間でなくなりました。」

「ただ、一さいは過ぎて行きます。」

「.....神様みたいないい子でした。」

この三つの文が私にはとても印象的で、今でも心の奥底で響き合っている。

1年 建築学科 石本末憂

てしまえば、人の目を気にしてしまうのだ。人に「非常識だ」と後ろ指を指されるのがこわいのだ。だからかもしれない、私は主人公が少し羨ましい。常識にとられずに行動できる、なんて羨ましい生き方なんだろう。きっと主人公はもう、丸善には行かないだろうと思う。だって丸善は、彼の中であとかたもなくふきとんだはずだから。きっと彼は、積み上げたままの画本や檸檬を誰かが見ても気にしないし、それを造っているところを見られてたとしても何も思わないのだろう。彼の世界には他人はいらないから。本当に彼を羨ましく思う。

『檸檬』の素晴らしいのは、あの表現の美しさだと思う。全体で見るとほの暗いのに、個々を飾る言葉が美しく、そのためか読んでいるときはあまり暗さを感じなかった。特に果物屋とレモンについて書かれている所はよかった。頭に、その果物屋にレモンが置かれているのがありありと浮かぶのだ。黒塗りのかなり傾きの急な板、その上にならぶ色彩鮮やかな果物、そして、その中にある、その店では珍しいごくありふれたレモン。のちにそのレモンが爆弾に見立てられるなんて、だれが思うだろう。でも確かに、丸善でレモンは爆弾だった。このかわりようが面白い。果物屋では普通の何の変哲もないレモンが、画本を積み上げた頂きに置かれると、とたんに緊張感をまとうのだ。もしかしたら、本当に爆発するかもしれない、と思わせる緊張感を。

たった数十ページほどの中に、これだけを詰め込んでもさりと読めてしまう。ある意味、レモンのような爽快さもあるかもしれない。今回、この小説を題材に選んでよかったと思う。

『天才』を読んで

「これから一緒に仕事をするには互いによく知りあうことが大切だ。我と思わん者は誰でも大臣室に来てほしい。何でもいってくれ。一々上司の許可を得る必要はない。出来ることはやる。出来ないことはやらない。しかし、すべての責任はこの俺が背負うから。以上だ。」これは田中角栄が総理大臣になるより前、大蔵大臣に就任した時、大蔵省の官僚に対して言った言葉の一部だ。「この人は私達の意見でもきちんと聞いてくれるのではないか」官僚達はそう思ったかもしれない。だがこの言葉には互いを知り合うという意味だけではなく、もう一つ隠された大きな意味があると私は感じた。それは「牽制」である。「出来ることはやる。出来ないことはやらない。」とある。この出来るか否か、同じく実行に移すか否かの判断は角栄本人がするのであって、もし大臣室に来たとしても角栄の性格からすると、自分の考えと違えば相手の言い分には絶対に納得せず自分の考えでねじ伏せるだろう。話を通すことはできるが、実現するかは分からない。「実現させたいなら俺を納得させてみる」と、啖呵を切っているかの様に思える角栄の強い意志が込められていると感じた。これが二つ目の「牽制」の理由だ。

角栄と言えば著者の『日本列島改造論』が有名である。スケールの大きさというか、見当も全くつかないことに對し、当時の人々が度肝を抜かれたであろうことは想像に難くない。以前、高速道路を利用した時、「誰がこのシステムを日本に普及させたのだろう」とふと疑問に思い、調べてみたことがある。それが角栄という人物を知り、興味を抱いたきっかけだ。高速道路だけでなく、新幹線、原子力発電に及ぶまで、角栄が掲げた理想の殆どが実現されていることも併せて知り、感動した。角栄が現代日本の全てを作り上げたと言っても過言ではないと私は思っている。

私は角栄の人生の中でロッキード事件だけは以前からどうしても意味不明だった。角栄は父親の影響からお金には注意して生きていただろうになぜ、という思いであった。本書には冤罪であったとも解釈できる表現もあった。この際、冤罪だったかどうかは別にしても私は事件について、今までよりも深くを知ることが出来た。米国の罫にかかり、有罪判決を下された。結果として犯罪者になったのは事実だ。だがその事実は角栄が世界最大の国を本気にさせるほどの権力を持った人物だったということの裏返しだと思える。

2年 機械工学科 勝 吉 琉 斗

本書の著者は石原慎太郎氏だ。石原は反田中派の筆頭だった男だ。このことは本書を読む以前からも知っていた。石原は自分と考えの合わない、どちらかと言えば嫌いだったであろう人物を題材に一冊の本を書いたのだ。その背景が面白いと思った。角栄には自分を嫌う人たちをも魅了する強さ、憎めない人格があったのだ。

無理な話ではあるが、角栄と会って話がしてみたい。角栄を間近で感じてみたい。角栄は日本の法律を30以上も制定し、日本列島改造論で日本を劇的に変えた。角栄は常に強い意志を持ち、人々を魅了し、圧倒的な権力で日本政治のトップに君臨し現代日本を作った。賛否両論あるかとは思いますが、私は角栄を尊敬している。角栄は平成5年12月16日、75歳でこの世を去った。偶然にも12月16日は私の生まれた日だ。私はこの事実を知り、何かの運命なのではないかと感じ、誇りに思えた。角栄の様にはなりたくてもなれないと思う。だが、「田中角栄」という人物、その人生に感銘を受けた一人として、自分の今を見つめ直し日々精進していきたいと思う。角栄の最終学歴は現在の中卒以下だが、総理大臣になった。だからと言って勉学を疎かにしようという訳ではない。ただ協調性や社会性、人間性が欠如してしまえば、高い学歴であっても何の意味も成さないと私は思うのだ。

角栄の様な人物がこれからの世に生まれることはないだろうと私は断言する。やはり角栄は日本を変えるため、生まれるべくして生まれた『天才』だったのだ。



『人間失格』を読んで

その本からは計り知れない「闇」を感じた。今まで読んできた本の中でも一番と言っていいくらいの「闇」。だけれど、何故か引き込まれていく。読みたくなくなる。これはやはり作者の凄いとこころなのであろうか。

裕福な家庭に生まれた葉蔵は幸福や苦しみといった感情が分からなかった。人を怖がり自分の感情は表に出さず、「お茶目」といった偽りの自分を演じる。やがて東京に出てくるが、酒と煙草に溺れてしまう。二人の女性との出会いがあるが、一人とは心中を計り、もう一人とは同棲するが、後に葉蔵は家を去ることを決める。そして三人目の女性と出会い結婚するが、酒をやめるために薬を使い薬物中毒者となってしまう。

裕福で毎日を満身に暮らせるということが本当の幸せではないのだと感じた。葉蔵は家が裕福であっても幸福を感じることはなかった。葉蔵は何を欲していたのであろうか。葉蔵が無意識のうちに欲していたもの。それは人から受ける「愛」だったのではないだろうか。葉蔵にとって家族は恐ろしい存在だった。家族一人一人、何を考えているのかがわからなかったからだ。だから、家族の前でも「演じる」しかなかった。家族の中に自分の本当の気持ちを打ち明けられる人がいない、まさにこれこそ本当の「不幸」なのではないだろうか。

私自身は愛を与えられて生きてきたと思う。私の家は裕福とは言えない。でも、いくら過去を振り返っても、幸せな記憶しか残っていない。勿論今も幸せだと思っている。家庭の存在は大切だと思う。家族が落ち着く存在だと思えることは幸せなことなのだ改めて感じた。

また、欲は人間にとって大切なものだと思う。欲がなければ人は成長しない。勿論欲をむきだしにしてはいけない。でも、欲は誰にでもあるはずのものである。葉蔵にはそのあるはずの欲が無かった。葉蔵は一人の女性と心中を図る。葉蔵には「生きる」という欲がなかった。「生きる」という欲がないから簡単に「死のう」と思えるのだ。欲が無いことは恐ろしいことだと思った。人間は常に「生きる」という欲を持ち続けている。その人間本来の姿が欠けてしまうことの恐ろしさがこの場面からは伝わってくる。

この本を読み進めていく中で、率直に葉蔵のような人間にはなりたくなかった。まるで抜け殻のよう

2年 機械工学科 藤田 健太郎

だと思った。死んだように生きる、そのような生き方は絶対にしたくない。葉蔵は酒に溺れアルコール中毒になってしまう。更にそのあと酒をやめるためにモルヒネという薬物に手を出してしまい薬物中毒者になってしまう。あまりにも残酷な結末だと思った。後に病棟に入って療養することになるが、この葉蔵についての話が終わった時点で、彼はまだ二十七歳なのである。二十七歳になるまでこれほどまでのことをしてきたのかと衝撃を受けた。

この『人間失格』という本はあくまで小説である。作者である太宰治は生涯自殺未遂と心中未遂を繰り返していた。彼には相当苦悩があったに違いない。このような作者の背景とこの本の内容は類似しているように思える。そのため、この本からはフィクションとは思えないリアリティが感じられた。

この本はたくさんの教訓を与えてくれる。内容としては非常に重苦しい内容ではあったのだが、今回この本を読んでみて良かったと思う。本当の幸福とは何なのか。人間は欲がないとどうになってしまうのか。これからもしっかりと考えていきたい。



『火花』を読んで

お笑い芸人ピースの又吉直樹が、お笑いを題材として書いた作品『火花』。この作品はお笑いの世界は難しいという話をしているだけでなく、生きるとは何なのか?について書いていると思う。例えば、作中に何度も師匠と主人公の会話がでてくるが、そこには、自分について、お笑い芸人について、熱く語っている主人公がいる。

「まだ僕は、自分の人生観を語るができるような年齢ではない。だから……」と、ふと僕は思ってしまった。

しかし、この本の中の人たちが人生観を語ることが出来ているのは、大人だからではない。本気で笑いのことを考えているから自信を持って自分の人生観が語れるのだと思う。読んでいくうちにそれに気づいた。僕は、「だから」と言い訳をして年齢のせいになっているのだと、逃げ道を探していたのだと気づいた。そして、同時に本気でやればいいのかと分かることができた。

さて、ここで何故「火花」という題名なのか、自分なりに考えてみた。これには二つの理由があると僕は考えている。

一つ目は、花火の中の小さな火花(存在)という意味ではないかと思う。冒頭部分では主人公が漫才をしている中、大きな花火が上がる。その花火に客を取られ、彼らの漫才を聞く人がほぼいない。大きな花火に対して彼らは火花のようなちっぽけな存在であった。

二つ目は、作中に師匠と主人公がお笑い芸人について、自分の意見を言い合う部分があり、それがパチパチと火花を散らすかのような言い合いだったからだと思う。

この二つを比べると最初ちっぽけな存在と考えていたところから、師匠に出会うことにより、お笑いについて自分の考えに自信を持ち、師匠とお笑いについて言い争い、張り合うようになる。やはり、変わったポイントとなるのは、本気で笑いを考え始めたことが大きいと思う。

しかし、自分も本気になったことがない訳ではない。例えば、学生でいうと、勉強、部活などが当てはまるのではないだろうか。そりゃ誰だって本気になったことは一度はあるはずだ。でも、その本気は、仮の本気に過ぎないと思う。例えば、勉強はテスト前しか本気にならない、部活はきついから手を抜く、こういうこ

2年 電気情報工学科 黒木春伸

とである。同じく僕も、これから先、真の本気は出さないうだろう。理由は簡単で、今が楽しいからだ。手を抜きまくっている、今が楽しいから現状を変える必要はないと思う。というのが僕をはじめとして今の学生の本音ではないだろうか。とにかく現状維持しようとしてしまっている。だから、僕たちには師匠と主人公のように熱く語れるようなことを一つでもすることが重要なのではないだろうか。それで人生が変わるのだから。

師匠と主人公。仕事はあまりなく、どうしようか悩み続けて、辛く、しかし、楽しそうな人生だった。やはり、誰もが、自分のやりたいことをして、楽しい人生を送りたいはずだ。しかし、そのためには、辛い努力をしないとイケない。もっと言うと、努力をしてもつらい人生かもしれない。そこには、絶望と希望が同時にあって、悲惨と栄光がある。さて、生きるとは何なのか。その道しるべになるかもしれない師匠の言葉、僕が一番気に入った言葉、「漫才師とはこうあるべきと語るものは永遠に漫才師にならへん。憧れているだけや。」

この言葉で、まだ真の本気で何かをしたことがない僕には、その答えを出すことができない。そう思われた。逆に、それができれば答えが出るかもしれない。チャレンジしてみる価値はある。そうすれば、生きるとは何かについて分かる日が来るかもしれない。その日が来るのを期待、いや、信じて。いや、その日が来るように努力することが大切だ、ということを感じられた本だった。



『変身』を読んで

2年 物質工学科 馬場詩織

「ある朝、グレーゴルが夢から覚めると、ベッドの中で自分が大きな毒虫に変わってしまったことに気がついた。」カフカの『変身』の有名な冒頭の一文。私は、この一文を読んですぐにこの本に引き込まれた。興味がそそられないわけがない。なんといいても、主人公は人間ではなく毒虫なのだ。読書が苦手な私でも、これからグレーゴルがどうなっていくのか気になりだすと、ページをめくる手が止まらなくなっていった。

この本は、私が想像していた以上に考えさせられることが多くあった。題名の通りで、人間の変身する姿がとてもリアルに描かれていて、現実の私たちにも置き換えることができるのではないかと思った。

この『変身』は、毒虫になってしまった主人公のグレーゴルと家族のを中心として物語が進んでいく。両親の借金を返済するため、不当な扱いを受けながらも必死で働いていたグレーゴル。虫の姿になったことで、グレーゴルは言葉が通じなくなり、味覚も変化した。なれない体で自由に動くことも難しくなり、そこで妹のグレートが面倒を見るようになった。グレーゴルは日々自分のなかの人間らしさを失っていく。唯一の収入源がなくなった家族は、自分たちで働き出さなければならない。すると、だんだん家族のグレーゴルに対する反応が変わっていった。グレーゴルは、母に恐れられ、妹に厄介者にされ、父にはリンゴを投げつけられた。絶望したグレーゴルは、最期は家族のためを思い息絶えた。そして物語の終盤、家族三人は仕事を休みピクニックに出かける。そこで両親は娘の姿を見て、新しい希望を抱き前に進んでいこうと決意する。そして、三人は新しい人生を歩んでいく。

こんなにも家族から裏切られたのにもかかわらず、グレーゴルは家族のためを思いながら死んだのだ。はじめ私は、「きっとすぐに元の姿に戻る」そう思いながら読んでいたので、最期には何とも言えない後味の悪さを感じた。

最期を迎える前、妹はグレーゴルのことを「怪物」と言った。私には、家族を思い続けているその姿をどうみても怪物とは思えなかった。それよりも、両親や妹の方が怪物に変身してしまったように感じた。

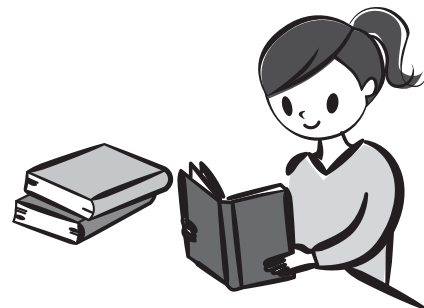
私は題名の「変身」が、グレーゴルが毒虫になったことだけを表しているのではないような気がした。両親、妹は物理的にこそ変わらないながら、内面的には大きく変身していると思った。

この作品で私が一番深く印象に残った場面は、妹がグレーゴルを部屋に閉じ込めた場面だ。閉じ込める前に、妹は両親に本音をぶつけていた。「あいつはいなくなればいい。」と言ったのだ。しかし、閉じ込められたグレーゴルは感動と愛情とをこめて家族のことを考えた。

私はとても悔しく、悲しい気持ちになった。なぜこんなにもグレーゴルは、家族のことを想えるのか理解できなかった。両親、妹から嫌悪されひどい仕打ちにあったにもかかわらず、嫌ったり恨んだりしていないのだ。この姿に心を打たれた。グレーゴルの家族に対する愛情が痛いほど伝わってきた。そしてその後グレーゴルは、自分自身の存在を誰よりも強く否定した。

この場面を読んで誰もがグレーゴルのことを哀れに思うだろう。「姿が変わった」というだけで、周囲の者の目はすっかり変わってしまう。そういうことも作者のカフカが伝えたかった中の一つだと私は思う。

私は、この『変身』を読んで、グレーゴルは仕事に不安や不満がつのり積もって毒虫に変身したように感じた。毒虫は今でいう「引きこもり」なのではないかと思った。仕事や学校生活などに対して、世の中にはグレーゴルのように不安や不満を抱えている人が大勢いる。もし、家族がグレーゴルのことをもっと支えていけば、グレーゴルは毒虫にならなかったかもしれない。毒虫に対する家族の反応はとても残酷だ。しかし、私は家族にも同情せずにはいられなかった。



『罪と罰』を読んで 殺人をした主人公への「罰」とは

2年 物質工学科 前田 稜太

「将来英雄になるであろう非凡な人間は、それが英雄となるために避けられないことであれば、社会道徳を踏み外す権利を持つ」という考えを持つ主人公ラスコーニコフは、あくどい商売をする質屋の老婆を殺して金を奪い、さらに、殺害に居合わせた老婆の妹も殺してしまった。

果たして、このような、「悪人」としか言いようのない行為を行う人間が、「英雄」と呼ばれるのにふさわしい人間になることができるのだろうか。僕は絶対になれないと思う。まず、自分が将来英雄になると思っていると時点で、そんな傲慢な考えでは英雄になる資格すらないと思う。世の中の「英雄」と呼ばれてる人々の中で、初めてから自分は将来英雄になると予想して行動してきた人なんていないと思う。皆、人々のためになることをしたい、どうにかして人々の役に立ちたい、といったことを考えながら行動した結果、「英雄」と呼ばれるのにふさわしい人になったのだと僕は思う。

殺人を行った主人公は、いきなり精神的に苦しむことになる。罪の意識、幻覚、自白の衝動などが主人公を苦しめていった。「英雄」となる前に平凡な「悪人」で終わることを恐れていたのだ。ある時は罪の意識のためにその場に倒れた。またある時は、見知らぬ男から「人殺し」と言われた幻覚で立ちすくんだ。

僕は、主人公は人生の敗者になることを恐れて苦しんでいるように見えた。将来英雄になるであろう非凡な人間は、それが英雄となるために避けられないことであれば、社会道徳を踏み外す権利を持つという考えを持っていても、殺人という罪がその考えを押しつぶし、ばれてしまえば警察に捕まり、殺人で逮捕された人生の敗者となることを恐れさせたのではないかと思う。誰でも罪を犯せば罪悪感を感じる。この時、主人公の心は罪悪感でいっぱいになっていたのだと思う。

そんな主人公は、マルメラードフというアルコール中毒の男が馬車に轢かれたところに出くわす。主人公は死にかけた彼を家まで運ぶが、介抱の甲斐なく死んでしまった。そこに駆け付けたのは彼の娘のソーニャだった。この出会いは、言わば「運命の出会い」であったと思う。彼女は、今後の物語の中で大きな力ギを握る人物であった。

主人公は、自殺してもおかしくない境遇にあっても、キリスト教の信仰を守り、生き続ける彼女の信仰の強さに驚き、存在に関心を持った。

僕はこの時主人公が彼女と出会っていないければ、主人公は罪の意識で自殺していたと思う。殺人という重い罪が心に重くのしかかり罪におびえるみじめな自分に気付き、自分は英雄にはなれない、ただの悪人だ。と思い、こんなことなら死んだほうがマシだ。と考えて自殺という選択をしていたのではないだろうか。やはり、心の支えになる人がいるといたないとは大きな差があると思う。

その後、主人公は自分の殺した、老婆の妹がソーニャの友人であったことを知る。彼女と出会ってから彼女の様々なことに関わっていった主人公は、ついに彼女に自分の罪を告白した。その時主人公は、「果たしてぼくは婆さんを殺したんだろうか?ぼくは婆さんじゃなく、自分を殺してしまったんだ、永久に。」ということを行った。この言葉は、主人公の苦しみを一言で表していると思う。苦しみに耐えきれなくなり、心からあふれ出てきた気持ちではないだろうか。

最終的に主人公はソーニャの力をかりて自首した。

罪を犯し、味わった耐えがたい苦しみこそ、主人公への「罰」だったのではないだろうか。



『檸檬』を読んで

私はこの作品を読んで、心がワクワクするようなおもしろさや、しみりするような感動など、具体的な感情が起こらなかった。文章から伝わってくる主人公の心情をうまく理解できなかったからだ。作品中で主人公は飲酒により病気を患っており、しかも借金まで抱えている。私自身そういった立場に立ったことがないため心情を理解するというのは難しい話であると思う。しかし、そんな文章の中でも、一個の檸檬は色彩は鮮やかに、輪郭ははっきりと、生き生きとしたイメージを持たせた。それは、私に理解しきれない主人公のどこかぼんやりとした暗い心にその一個が持つエネルギーが光を与えているように思えた。

作品中で主人公は「見すばらしく美しいもの」に強くひきつけられている。例えば壊れかかった街だとか、見すばらしい家が立ち並ぶ裏通りなどである。見すばらしいという言葉と美しいという言葉とは正反対の意味を持っているのでこれもあまり理解し難かった。おそらく、主人公は、自身の心と見すばらしいものと重なって見えたのだろう。そして、そのようなものに親近感や安心を覚え、それが美しさなのかもしれないと思った。確かに美しいものというのは、人間のその時々心の变化によって変わるものなのかもしれない。私の経験で言えば、みんなで会話を交わしながら楽しい気分で食べる食事はおいしく感じ、けんかなどでもして暗い気分で食べる食事はあまりおいしく感じない。美しさというのもそのようなものではないかと思った。

でも、そんな中で、檸檬は少し違う存在のように感じた。なぜなら、主人公が好んできた見すばらしく美

2年 建築学科 青井優奈

しいものは、主人公の気持ちと同じような存在であったが、檸檬は主人公の気持ちを明るくさせた存在だからである。人間がある人の悪口を言うとき、それに一緒になって悪口を言う人、それが見すばらしく美しいものであるなら、悪口を言うことに対して注意する人であったり、悪い気持ちを忘れさせてくれるような人が檸檬かもしれないと思った。

主人公が檸檬を見つけたのは、周囲が、暗い建物で囲まれた果物屋だった。主人公はそれらに強く惹き付けられたのだ。そしてそれを持って丸善というところへ行き、次から次へ本を重ね、その上に檸檬を置きそれをそのままにして帰るといったずらをする。私はこの場面で果物屋にあった檸檬と非常とも思えるようないたずらをする主人公が重なった。人の心は不思議だと思う。主人公が感じている憂鬱さとは少し異なるかもしれないが、私も時々訳もなく憂鬱な気分になる時がある。何もかもが面倒くさくて、人と話してみても気分が晴れなくて、かといって、一人でいると変に寂しくなるような時だ。こういう時、普段気にも留めないような小さなものが自分の中で特別に思えたり、嬉しくさせたり、悲しくさせたりする。また、主人公のいたずらと同じように周囲から見れば意味のない行動でも自分にとってはその時とても意味のあるもののように感じる。私もそういう経験があるので、主人公の気持ちをすこし理解できた。檸檬といたずらは主人公に何か特別なことを感じさせたのだろう。

私はこの作品を通して、憂鬱なときに感じる美しさを与えてくれるものは自分だけのものではいけないので貴重なものなのかもしれないと思った。

『百物語』を読んで 傍観者の意味

3年 機械工学科 森園悠太

傍観者とはどのようなものか。話題の中に居るのか外に居るのか。なにを考えているのか、あるいはいないのか。

傍観者とは、例えばサッカーの試合を傍から見ている観客のようなものではないか。字のごとく考えればそうなのである。しかしその観客が片方のチームを熱心に応援していれば、傍観者の意味とは違ったもののように思う。たとえ試合中のプレイヤーであっても、

主観のみでない視点をもって自分の存在を意識していたのなら、傍観者と呼べるかもしれない。

僕は普段、主観に基づいて物事を見ているが、まれに傍観者としての立場をとる場合がある。例えば夏祭りに行き人ごみの中にいる時に傍観者となる。人が大勢いる所が好きではなく嫌々つれられた祭りで、自分と他人の違いを意識した。冷めた自分の孤独さと、他人の浮わついた様子をただ感じていた。その時、自分

でも他人でもない「傍観者」としての目で自分の存在を知った気がした。

森鷗外の「百物語」に四人の傍観者が登場する。百物語を主催する若い富豪の飾磨屋とその馴染の太郎、百物語に参加する主人公、以前に主人公が会った老学者である。それぞれの人物の傍観者たる性質から傍観者ということについて考えてみたい。

飾磨屋は百物語を主催しているが、目的が定かでない。自分が楽しむわけでも、誰かを楽しませるわけでもない。ただ人を集め、話家を呼び、部屋でじっと座っている。集まった人々を見て、何を考えたのか。豪遊をしていた、以前の自分の姿を参加者に重ね合わせ以前の自分の愚かさを顧みていたのではないかと思う。また、太郎も百物語に興味があるわけではなく、ただ座っているだけなのである。東京一の芸者と言われる彼女も、多くの人と交流してきた中で傍観者としての悟りを開いたのではないかと思う。主人公の言う「病人に看護婦が付いているよう」に沈鬱な二人は、以前までの華やかだが虚しい自分を回顧、反省し、その時の姿を百物語の参加者に重ね、少しの蔑みをもって見ていたのではないかと思わせる

主人公もまた傍観者である。百物語よりもそれを主催する飾磨屋に興味があって参加した。参加している間、他の客の会話の白々しさ、飾磨屋と太郎の不思議さについて考えている。また、四人目の傍観者、主人

公が西洋留学時に会った不治の病の老学者はある物事について考えている。病気のために踊りをしたことがないこの老学者は、舞踏の必要性について口論している人に「踊っている人はまるで神のようでただ見ていることしかできない」と言った。主人公と老学者は、主観を持っていながら、物事の全体を俯瞰で見ることによって、傍観者の立場からそれぞれ飾磨屋、舞踏の本当の姿や意味を見つけようとしているのではないか。

傍観者達は、成るべくして傍観者としてなるのだと思う。飾磨屋は豪遊の中でその行為の虚しさを感じ、太郎は人とのつき合いの中で自分がどういう存在か知った。主人公は西洋留学をした際の経験もあり、日本人とは違った考えを持った。病気の老学者は、そのハンディからくる他人との違いを自覚した。それぞれの他人との差異により、傍観の目を養い、自分や世間を見ているのだ。

四人の傍観者はそれぞれ違った見方で人々を見ているのは確かだが、結局は同じなのだ。他人の行動を見て、自分や物事の過去を照らし合わせる。自分が今、どうであるかではなく、自分や物事がどうであったかを考えることで、物事や自分の存在を主観の外から客観的に捉えられる。

傍観者はそうして他人を通して自分を見極めているのではないだろうか。

『ひかりごけ』を読んで

この本を読み終えてまだ何か解決しきれていないような、モヤモヤとすっきりしない不思議な気持ちになった。この小説は極限状態に置かれた人間が生き延びる為に死んだ仲間の人肉を食べるという実際に起こった事件を「実」「虚」を織り交ぜながら書いたものだ。この実の部分だけであれば、なんて残酷非道な事なんだろう、現代では絶対あり得ない事で、例え自分が船長と同じ立場であったとしても、こんな恐ろしい事思いもつかないだろう、こんな人間本当にいたのだろうか...これが感想だ。だが、「虚」の部分がある事で、残酷な事件を起こした船長が最後には人間らしく見えてきたのだ。だから私は不思議な気持ちになったのだと思う。例えば、「第二幕・法廷の場」を書いた部分。実際に法廷で裁かれたので実ではあるが、その内容や船長の言葉は虚だ。私は、この場面での船長の言葉が

3年 電気情報工学科 清家竜司

いくつか疑問でもあり印象に残っている。

一つは、「私は我慢しています。」という言葉である。船長はこの言葉を「第一幕・マッカウス洞窟の場」で「俺は我慢してるさ。」と表現を変えて言っている。第一幕での我慢は、空腹やこのまま死ぬかもしれない辛さの我慢であると思う。だが、第二幕での我慢という言葉の中には、とんでもない事をしてしまい、償う方法さえ見つからずただ自分を責め続けているという船長の後悔の気持ちが伝わってきて、第一幕での船長とはまるで別の人間に思えた。

二つ目は、「私は検事殿に裁かれても裁かれたとは思えません。」という言葉だが、実際にあの食うか食われるかの極限状態を体験し、そして自分の犠牲になった者だけが自分の愚かさ、醜さ、弱さを知っている。だから、全てを知っているものに裁かれる事だけが本

当の裁き、罪への報いだという船長の思いが伝わってきて共感はしないが、同情のような気持ちが湧いてきた。

最後の場面で人肉を食べた者だけに現れるという「光の輪」が船長の首の後ろにつくのだが、作者は法廷にいるすべての人々にも光の輪を点もしている。これは前に書いた私の疑問だ。船長は分かるが、何故皆にも点もしたのだろうか。まさか本当に船長と同じ罪を犯した訳ではないだろう。そこで、この小説での本来の光の輪のもつ意味ではなく、例えば、人間誰しも大なり小なり罪を背負って生きているとか、極限状態になれば誰もが何かしらの罪を犯す可能性がないとも言い切れないという事を伝えたくて、皆に光の輪を点もしたのではないかと自分なりに解釈した。船長が「見て下さい。よく見て下さい。」と光の輪を見せようとする

るが、皆も光が浮いているので見えることはない。「私をよく見て」という言葉は外側でなく、もっと内側、私の心の奥深い所、あの時のそして今の気持ちももっとよく見て、知って、分かって欲しいという船長の心の叫びにも聞こえて、何かむなしさも感じた。

この小説の作者は、実と虚をうまく組み合わせて船長をあらゆる角度から見せる事で、読者を小説の世界に引き込んでいると思う。

別の感想だが、「ひかりごけ」の説明の文で、「光り輝くのではなく、光静まる。光を外へ撒き散らすのではなく、光を内部へ吸い込もうとする。」という表現が印象に残った。けなげで大人しいが、周りに左右される事なく自分の意志を持って生きているという感じがしたからだ。

『木』を読んで 木に教えてもらったこと

3年 物質工学科 山口 陽 香

「杉はたて稿のきものを着ている、縄文杉もたて稿だった」…この著者の視点に、驚きと感動を覚えた。

この本には、「藤」「ひのき」「杉」など十五章にわたる。著者と木々との交流の記録が綴られている。冒頭で挙げたのは、「木のきもの」の章で私が特に印象深かった一言である。木を人に見立てているというよりも、むしろ「いきもの」として木の生命を見つめている、という感じを受けた。

「ひのき」の章には、アテという、木材として使いものにならない曲がりやクセのある木のことが書かれていた。苦勞して生きてきた証、いわば力であるゆがみや曲りを欠点と言うのはあまりにも冷たい、と著者は言う。なるほど、そういう考え方もあるのかと衝撃を受けた。確かに、まっすぐなものは見た目にも美しく、材としても役立つのだろう。私もこの本を読むまではそう思っていた。しかし、著者の言うように木のたどってきた運命までを見つめてみるとどうだろうか。木の生命力が感じられる。アテにはアテなりのたくましさ、美しさが秘められているのだと気づく。木の運命をも見つめる著者の視点は、とても素敵だと思った。

この本を読み進めるうちに、木は人間と似ているのかも知れないという考えに、私はたどり着いた。木はそれぞれのきものを着ている。つまり個性を持っている。人間にも個性がある。見方、考え方次第で様々な感じ方ができる点についても同じだと思う。私は、自

分で短所だと思っていた部分を褒められたことがある。視点はそれぞれ違い、どう捉えるかによっては真逆の印象を受けることもあるのだと実感した。

「えぞ松の更新」の章には、北海道の自然木での経験が記されていた。えぞ松の新芽が倒木の上に育つ、このことを倒木更新と言うらしい。死んでしまったように思われる倒木だが、未来のえぞ松たちのために良い環境を作っているのだ。人間も、先祖がいるからこそ今日であり、周囲の人との関わりなしでは生きていけないものである。このように時間は流れていくのだなと感じた。また、この章では雫の落ちて葉を打つ音が「雨の名残りか、霧のおみやげか、それとも松の挨拶だろうか」と記されている。この美しい表現が、私を本の中へと引き込んだ。

「材のいのち」の章では、木は立木である時と材になってからと、二度の生命を持つのだと教わった。これは人間でいうと何にあたるのだろうかと考えを巡らせる。一つは、身体が生きている間の生命、もう一つは死後に周りの人の心の中で生き続ける生命、といったところだろうか。人が発した言葉、人との関わり、思い出、その存在は身体が死んでも影響を与えるものだと思う。私自身、人に何かを与えられる、死後も人の心に生き続ける人間でありたい。そして、周りの人からも様々な事を吸収し、もっと心の豊かな人間になりたい。根から水や栄養をぐんぐん吸い上げ、日

光を少しでも多く浴びようと枝を伸ばし葉を広げる、木のように。

「木」というたった一文字の題名に何か心惹かれるものを感じ、この本を手にとった。読んでみると、木の生命力、人間も木も同じ「いきもの」であること。そして生と死の問題についても深く考えさせられた。生

きている間の生命、死後の生命……矛盾しているようだが、この二度の生命は木に限らず人にも存在すると思う。一度目の生命を終える時、胸を張って二度目の生命へ向って行けるように生きたい。そう、木のように、行きたい。

『老人と海』を読んで

私は、この本を読み終わった後、現実世界に引き戻された感じがすごかった。なぜなら、本に描かれている徹底した外面描写が私をこの本の中に放り込み、私も同じ舟に乗り、様々な困難を主人公であるサンチャゴという老人と乗り越えている気がしたからである。例えば、老人が大きな魚をつかまえた後に、その魚と過ごした三日間では、天気や海の様子、または、その三日間の中で出会った動物の詳しい所まで描かれていた。

そのようなストーリーの中で、私はたくさんの心に響く言葉を見つけた。

一つ目は、『あの子がいたらなあ』という老人の言葉。これは、大きな魚をつかまえて大変な時間を過ごす老人が舟の中で言った言葉である。私は初めこの言葉を読んだ時、老人は少年をとてにも気にいっていたんだとびっくりした。この本を読み始めて、老人と少年の会話を見ている、老人がそれほどまでも少年の事を好いているように感じなかった。しかし、舟の上で大声でどなるほど、老人は少年を必要としていたのである。また、老人がたくさんの困難を乗り越え、大きな魚を取って帰ってきた後の少年の姿が老人を思いやっていて、二人の仲はとてよよいものなのだと改めて感じた。私にも世代を越えて仲良くできる相手が欲しいなと感じた。

二つ目に、心に響いた言葉は『人間は殺されるかもしれない、けれど負けはしないんだぞ』である。これは、大切に愛情までもそそいだ大魚が一匹の鯨によって傷つけられていくのを見かねて、大魚のためにも鯨を殺した時に言った言葉である。殺した後、老人は、かわいそうなことをしたと心のうちで考え込むほど、老人にとってこの鯨を殺すのは他の食材として殺す魚とは大きく違ったものであったのだ。自分の命が失われるのは怖いけど、それよりも大魚のために立ち向かうという強い心がこの老人と大魚を助けたのだ。それ

3年 建築学科 新見彩華

でよかったんだと私も思う。この言葉から私は、強い気持ちや志を持つことはとても大事なことであり、必要であるのだと思った。それも、誰かのために頑張るといのは、自分一人で頑張るよりも大きな力を発揮できる源になるのだと感じた。

三つ目は、『落ちつけ、元気を出すんだ、爺さん』という言葉。これは、大魚と戦っている最中に、意識がもうろうとしたり、けがをしたりしている中で、自分を奮い立たせようと、心の中の自分に投げかけた言葉である。この『爺さん』という言葉は、舟の上で老人が自分に対して何度も言っている。私は初め、他の誰かが問いかけた言葉だと思っていたが違った。老人が自分自身で言ったのであった。大魚や鯨などに立ち向かう姿を考えると、自分のことは、俺などの勇ましい言葉を使っていそうだが、そこをあえて『爺さん』という言葉にした理由は何なのだろうか、ととても疑問だ。もしかしたら、老人は自分の老いている姿を海で毎日水面とにらめっこしながら見ていて、急に体の疲れが顔などに出てふけて見えたから、そう言ったのかもかもしれないと私は思った。

このような、三つの言葉から、とても深く考えさせられる物語であったと感じた。老人と少年の仲、老人の動物に対する愛など、様々なコミュニケーションが具体的に描かれており、老人と同じ目線で私も海で過ごした感覚が残っている。私はこの本との出会いから考えさせられた、相手を思う気持ちというものをこれからの社会でも、しっかり自分自身に問いかけながら過ごしていきたいと思う。

今年度の活動と来年度の図書委員会について

学生図書委員長 清 武 大 晃

今年度の学生図書委員会では、主にテーマ展示、オープンキャンパスでの図書館開放イベント、ブックハンティング、深山書評などの活動を実施しました。

テーマ展示では、テーマを設け、図書館に所蔵されている書物の中から、テーマに沿った自分たちがみんなにお勧めしたい書物を選び、紹介文を作成しました。紹介文は冊子体に製本し、各学年・学科に配布してできるだけ多くの方に手に取っていただけるようにしました。

オープンキャンパスでの図書館開放では、本校にお越しくくださった方々に本の紹介、閉架書庫ツアー、クイズラリーなどの企画を行いました。本の紹介では、中学生を対象に図書委員が「中学生向けの本」を紹介しました。閉架書庫ツアーでは、普段私たち図書委員ですら立ち入る事ができない閉架書庫に入り、司書さんや図書委員による説明を受けてもらいながら、閉架図書を案内しました。クイズラリーでは、図書館に所蔵されている書物からクイズを出題し、全問正解した方には茶をプレゼントしました。中学生だけでなく保護者の方にも楽しんでいただけたと思います。

ブックハンティングでは、図書委員が各クラスの希望のもと、宮崎市内の蔦屋書店へ向かい購入にあたりました。その後、図書委員が、ブックハンティングで購入した図書のレビューを書いた冊子を作成し、各クラスに展示しました。それぞれ、おすすめの点などを記載してあります。学生の目線から選出されていますので、是非一度は手にとって下さい。

深山書評では、図書委員だけでなく学生全員に応募を募り、皆さんにお勧めしたい本の書評を提出していただきました。深山書評は、みなさんが図書館に足を運ぶ機会を増やし、より多くの本に触れてほしいという図書委員の強い思いから発案され企画したもので、今回で四回目でした。あまり応募数は伸びませんでした。まだ四回しか実施されていない企画なので、改良の出来るところはたくさんあると思います。昨年よりも応募数は増えているので、この調子で少しずつでも応募数が増えることを期待します。

今年度は、できるだけ利用者数を増やしたいと考えていましたが、あまり成果が得られませんでした。来年度は、今年度以上に図書委員が一丸となり、皆さんの心に残るような本を見つけられるよう活動をしていきたいと思っています。

副委員長 仲 澤 侑 花

今年度の図書委員会では、テーマ展示やブックハンティング、オープンキャンパス、深山書評などの活動を行いました。

特にブックハンティングは、図書委員が各クラスの希望に沿った書籍を購入する為、図書館とクラスをつなぐ良い機会であったと感じます。その後、図書委員が購入した図書のレビューを書いた冊子を作成し、より多くの生徒に興味・関心を持って頂けたのではないかと思います。

後期に開催した深山書評では、例年同様あまり応募数が伸びませんでした。素敵な作品が多く、良いイベントになったと思います。

私は副委員長を務めるにあたり、利用数の増加や実施内容の改善を行いたいと考えていましたが、思うような結果は得られませんでした。来年度は多くの方が利用したいと思えるように各々頑張ってもらいたいです。



「第四回深山書評」受賞発表



< 2017年1月25日発表 >

第四回深山書評には13篇の応募が寄せられました。5名の審査員(図書館長および4名の学生図書委員)で選考した結果、下記の通り受賞作が決定いたしましたので発表いたします。

賞名	クラス	氏名	書評タイトル 『書名』 著者名	請求記号
図書館長賞	5E	宮崎 愛美麗	時をかける彼女 『陽だまりの彼女』 越谷オサム	913.6/コカ
深山賞	1E	児玉 聖	魅力ある古典部の紹介 『氷菓』 米澤穂信	913.6/ヨサ
優秀賞(3名)	5E	大庭 勇河	号泣する準備はできていた 『号泣する準備はできていた』 江國香織	913.6/イク /110
	2A	小楠 梨菜	人獣細工 『人獣細工』 小林泰三	913.6/コハ /s4460
	1A	亀澤 竜拳	「化物語」を読んだ感想 『化物語』 西尾維新	913.6/コソ /1, 2
優良賞(3名)	3M	吹上 由	3Dを感じる本 『パラシュート』 山田悠介	913.6/ヤマ /59
	3C	後藤 光貴	常識について 『人間的異常の考察』 宮本忠雄	493.7/ミヤ
	2C	山田 涼夏	銀河鉄道の夜 『銀河鉄道の夜』 宮沢賢治	913.6/ミヤ /s2216 他

審査員コメント

深山書評へ応募していただき有難うございます。今回は13件の応募がありました。

いずれも良い作品ばかりでしたが、図書館長と図書委員による厳正なる審査の結果、上記のように賞を決定しました。

受賞者の方はおめでとうございます。また、残念ながら受賞から外れてしまった方も、今回応募してくださった事にお礼申し上げます。来年度も深山書評を開催する際は、今回応募いただいた方も今回は応募できなかった方も、ぜひ読書のきっかけになってくれればと思います。

学生図書委員長 清武 大晃

表彰式

2017年1月27日(金) 16:30より、図書館第一閲覧室で表彰式を開催いたしました。



学生図書委員会

【図書館長賞】

時をかける彼女

この本はネタバレが入ると面白さ半減の為あえてあらすじを伏せたレビューにする。

三言でまとめると、リア充爆発しろと唱える人が発狂するようリア充の話・テストやレポートに追われているあなたにも立ち止まって読んで欲しい(約)300ページ。個人的には、意味が分かるとちょっと怖い話。

私はこの本を読んで心がぼかぼかした。陽だまりに包まれたように。ぜひ、これから読む方にもぼかぼかしてほしい。(“心がぼかぼか”に既視感を感じた人。物語には直接関係ないがきっと、最後でとある共通点を覚えるだろう。)

【深山賞】

魅力ある古典部の紹介

あなたは<古典部>を知っているだろうか。現国、古典の古典部である。しかし、だからと言って漢文古文などをより深く研究し、部員もそれを書く、といった部活ではない。活動目的不明で一時は部員ゼロの為廃部にもなりかけた。現在は部員四名で、日常に潜むちょっとした不思議な謎を解き明かしている…。

これこそが伝統ある神山高校古典部である。この古典部の年間を通しての活動が描かれているのが、米澤先生の代表作<古典部>シリーズである。現在は第六弾まで発表されているが、私がその中でも特にお勧めしたいのは第一弾である「氷菓」だ。

この作品は「青春ミステリー」として分類されているが、私はその一言で片付けることはできない。読み

【優秀賞】

号泣する準備はできていた

直木賞作品。本というよりは、誰かの日記を読んでいるようだった。

どこにでも転がっていきそうな話ばかり。でもそこがこの本のすごいと思ったところ。

どこにでもありそうな話だからこそ、それをここまで鮮明に書き表すのは難しいと思う。だって、自分の私生活を本にしてくれなんて言われたって絶対にムリ

5年 電気情報工学科 宮崎 愛美麗

最後に、この物語は恥ずかしい位に甘い恋愛小説であり、じわじわと不安を煽るようなミステリー小説であり、実はファンタジー小説でもある。更に、2013年に映画化もされている。映画を見たことのない人や全く知らなかった人、まずは1回読んでほしい。そして映画を見たもしくは1回読んだ人、改めてもう一回読んでほしい。ミステリーと謳った通り、序盤から伏線が張られていることに気付くだろう。それは結末を知っている人じゃないと、きっと分からない。

そして最後まで読んだ方へ。

タイトルの意味、お分かり頂けたらだろうか。

1年 電気情報工学科 児玉 聖

終わると言葉にすることのできない何とも言えない気持ちになるのだ。敢えて一言で表すなら「虚無感」だろうか。勿論、良い意味で。何れにせよ、私はこの感情を沢山のの人に知ってもらいたいと思う。

内容的にも、つまりミステリーとしても非常に面白く、且つ読者にも分かり易く書かれているので十分に楽しんで頂けるだろう。特に、この本が「氷菓」と名付けられた理由とその名前に隠された真実の解明は、全ての読者を惹き付けるだろう。

さあ、あなたもこの「氷菓」を読み、古典部の一員となって共に謎を解いてみよう。読み始めたら続きが「私、気になります」と言わずには居られなくなるだろう。

5年 電気情報工学科 大庭 勇河

だ。

号泣する準備はできていた。この本を読み終わったとき、そのタイトルの意味を理解した。なぜ「号泣した」でもなく「号泣する準備はできている」でもないのか。

売れない小説家の文乃と隆志の生活。初めはラブラブな暮らしを送る二人。でもそれはあっという間に終わってしまう。主人公文乃は「私の心臓はあのとき一

部分はっきり死んだと思う。さびしさのあまりねじ切れて」と言う。泣けば楽になるのに、文乃は泣かない。いや、泣けない。ただ、号泣する準備はできていた。

別にキュンとする話でもないしハッピーエンドでもない。面白かった、とひとことで表せるような話でもない。ただ、ありきたりな日常のはがゆさがつらつら

【優秀賞】

人獣細工

『史記』にでてくる戚夫人を人彘(ひとぶた)と名付ける話をベースに人獣細工の物語は出来ている。主人公は生まれて間もなく、ほとんどの臓器が使いものにならなかった。そこで、医者である主人公の父が異種移植という種の異なる動物間で行う移植を次々に行った。使われた動物は彘である。体の部位はほとんど彘のものになり、主人公は父が死んだ後自分が人間なのか、将又彘に成り果てたのかを知るべく、手術記録を狂ったように調べる。

作中で、見た目が人間で遺伝子が彘の動物はどちら

【優秀賞】

「化物語」を読んだ感想

私がこの小説のことを知ったのは、アニメがきっかけである。小説のほうが早くできていたのにも関わらず、アニメを観てから本を読むというのはおかしな話だとは思う。しかし、アニメがなかなかおもしろかったので、小説のほうも読んでみることにした。その感想を、これから書いていこうと思う。

まず、この物語は、主人公である阿良々木暦が、「怪異」に関わった少女たちと出会いその怪異にまつわる事件を解決する話である。登場人物ひとりひとりの個

【優良賞】

3Dを感じる本

「本の世界に浸る。」読書好きの人は皆同じことを言う。正直私は読書が好きではないし、この言葉の意味も分からなかった。しかし、この本を読んでみて分かった。

この本は、2人の大学生が行方不明になった事故か

と書いてある。でもありきたりだからこそ、簡単に感情移入できてしまう。そして何度も「泣きたさ」が込み上がってくる。でも、泣けはしない。

号泣する準備はできていた。読後の感想はまさにそれ。本当に上手いタイトルだと、心の底からそう思った。

2年 建築学科 小楠梨奈

になるのかを主人公と友人とで討論している箇所がある。友人は勿論人間だと言い、主人公は彘だと言う。今の医療技術が発達した世界では上記のようなことは法律を無視すれば、いくらでもやり遂げることができよう。そうなったとき、人権はどうなるのか。確かに人間であるという証拠は何なのか。どこからどこまでを人間とすることができるのか。はっきりと断言できないであろう。しかし、一度は人間であるための定義を自分なりに考えてほしい。

1年 建築学科 亀澤竜拳

性が表れており、ストーリーの展開を理解しやすい印象があった。また、この作品は、主人公とその他の登場人物による、台詞の掛け合いがとてもおもしろい。作者である西尾維新さんは、「とにかく馬鹿な掛け合いに満ちた楽しい小説を書きたかった」と言って、この小説をつくりあげたそうだが、この方の言葉遊びのセンスに驚かされた。この小説は、言葉の言い回しにも注目しながら読むことをおすすめする。

3年 機械工学科 吹上由

ら始まる。しかしこれは事故ではなく、テロリストによる事件である。2人を拉致したテロリストは、日本と戦争中のA国。A国のテロリストは、日本の首相に「2人の命が惜しければ攻撃を止める」と脅迫するが首相は応じず2人を見捨てる。見捨てられた二人組の名

は賢一と洸太郎。洸太郎は既に意識がない。そんな状況でテロリストは2人に命が助かる手段を1つだけ与えた。それがパラシュートである。パラシュートは洸太郎に着せ、2人を別々に空中から落とす。賢一が空中で洸太郎を掴めれば二人は助かる。果たして賢一はパラシュートを開けたのか…。

【優良賞】

常識について

少し変わった人と聞いてどのような人物像を想像しますか。私は自分以外の人全て少し変わった人だと思います。極端に考えると最終的にはそこに行き着くのではないのでしょうか。自分の中の良識、常識ではあり得ない言動をする人間。しかし、そんな常識は実存しない世間と常に照らし合わせる事は難しく、結局は自分の中でのみ定まります。では既存の常識を惟みで異常とは何かということ考察したものが本書です。孤独や独創性、性などを深層心理に基づいて合理的かどうかを吟味しています。一般的に異常といわれる人の言動に正当性はないのか。社会に順応した人が正常であるのか。本書を通して人間の欲求の主体が少し理

【優良賞】

銀河鉄道の夜

皆さんはなぜ読書をするのでしょうか。人によっていろいろな目的を持っているでしょうが少なくとも私は現実では体験できないことを本を通じて追体験するために読んでいます。これは本を読むことでしかできないことだと思っています。この「銀河鉄道の夜」はまさに、非現実的、非日常的な物語です。この物語はジョバンニとカムパネルラが銀河鉄道に乗って不思議な世界を旅するというものです。この不思議な世界には様々な宝石がでてくるのですがその宝石1つ1つのきらめき、輝きを表した言葉はこの本でしか味わうこ

あらずじだけ見ると、現実には考えられないような「もしも」の話だ。しかし、この本は本当に起きたかのようにリアルな情景が浮かぶように表現されている。

本を好きな人、そうでない人に関わらず、ぜひ読んでみてほしい。きっと手に汗握るだろう。

3年 物質工学科 後藤光貴

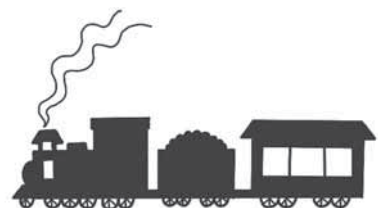
解できたと思います。特に、「孤独」に関しての著者の考察は、「独りでいることが難しくなった現代、人間は孤独を求めている」というもので、今までの自分の認識の浅はかさを思い知りました。他にも著者の主張や考えは人間の本質を語っていると私には思えたのです。本書を読めば常識というものを疑う事でしょう。私は今まで思っていた常識の非合理性や理解できなかった他人の言動の合理性を認めざるを得ない一冊でした。

青年期であるうちに今までの自分を疑えて大変よかったです。

2年 物質工学科 山田涼夏

とのできないものばかりです。また旅の途中で出会い別れる個性豊かな人々も魅力です。私達がいる世界とはちょっとだけ違うところにいる人、私達と同じ世界から来たと思われる人、それぞれが話すお話はどれも興味深いものばかりです。そして最後の同乗者にジョバンニが言われた言葉は私達にも通ずることで、おそらく皆さんも心に残る言葉となるでしょう。

さあ、あなたもジョバンニやカムパネルラと共に不思議な銀河鉄道の旅に出発しませんか？



図書館からのお知らせ

図書館開館予定について

今年度の夜間開館は、平成29年2月27日(月)までです。
(なお、平成29年度の夜間開館は、4月5日(水)の開始予定です。)

次の期間は、平日のみ開館します。(土・日・祝日は閉館)
期 間：平成29年2月28日(火)～4月4日(火)
開館時間：9時から17時まで

学年末・春季休業中の長期貸出について

通常10日間の貸出期間を学年末並びに春季休業中は、長期貸出とします。

貸出開始日：平成29年2月16日(木)
返 却 日：平成29年4月 6日(木)始業式
貸 出 冊 数：一人7冊まで



編 / 集 / 後 / 記

図書館だより 80をお届けいたします。

今回の図書館だよりには、本年度をもって退職される渡辺先生、濱田先生から玉稿をお寄せいただきました。ご多忙中のところご協力いただきました先生方には、この場をお借りして、厚くお礼申し上げます。

例年実施している校内読書感想文コンクールの入賞作品を掲載しました。入賞作品は、1年生～3年生の作品から選ばれた力作揃いで、昨年12月の全校集会で表彰されたものです。ご多忙中、学生の読書感想文をご指導下さいました国語科の先生方に厚くお礼申し上げます。

春休み中も図書館は開館していますので、春の陽だまりの中、静かな図書館で是非読書に励んでください。皆さんのお越しを、スタッフ一同待っています！

